

金沢望郷歌

五木寛之



金沢望郷歌



五木寛之

金沢望郷歌

かなざわぼうきょうか

1989年4月30日第1刷

著 者 五木寛之



発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京 03 (265) 1211 (代)

印 刷 大日本印刷

製 本 加藤製本

(定価はカバーに表示してあります)

©Hiroyuki Itsuki 1989 Printed in Japan
ISBN 4-16-310340-6

金沢望郷歌／目次

夏の挽歌

5

冬の春歌

59

春の校歌

127

秋の憂歌

187

あとがき

248

装画
内田あぐり

金沢望郷歌

夏の挽歌

I

午後の廊の町は、いつも眠ったようにひっそりとしている。まして日のながい七月であればなおさらだ。裏庭の松の木の上で、ひっきりなしに蟬の音がきこえていた。窓の外につづく瓦屋根の照り返しがまぶしかった。

「ちょっと気になる噂を耳にしたんだが——」

と、こちらに背をむけて立ったまま外を眺めていた久留島くさしまが言った。なみはずれた長身の彼の頭は、せまい小部屋の天井に今にもつかえそうに見えた。

「あんたが雑誌をやめるらしい、という話をした男がいた。冗談もいいかげんにしろ、と、おれは一蹴しておいたが」

「なるほど」

私はテーブルの上の彼のコップにビールを注ぎながら、苦笑して言った。

「まったく、そんなニュースときたら、あつというまに仲間うちに伝わるもんなんだな」
「で、実際のところは、どうなんだい？ やっぱりつぶれるのかね、〈海市〉は」

ふり返って久留島がきいた。そのいかにも九州人らしい率直な口調が、私にはうれしかった。
なにごとにつけ、遠回しに婉曲な物言いをする金沢式のやり方に慣れてしまっている耳には、そのときの彼の無作法とも思える質問がかえって爽快にひびいたのである。

「今年いっぱい持ちこたえられるかどうか、というところかな」

私は正直に答えた。

「やっぱりそうか」

うなずきながら久留島は私の前に坐った。髪を短く刈り、白い半袖シャツから陽焼けした腕をのぞかせている彼の風貌は、編集プロダクションの主宰者というより、学校の体育教師を思わせる。事実、彼は大学を出たあとしばらく、郷里の福岡の中学校に教師として勤めていたことがあるらしい。

「問題はなんだい。いや、いまさら聞くだけ野暮か。それにしても〈海市〉がつぶれるとはねえ」

久留島は私が注いだビールを、喉仏を上下させて一息で飲みほすと、〈海市〉はいい雑誌だったんだがなあ、と独りごとのようにつぶやいて窓の外を夏空へ目をやった。

「そういう評判に甘えていたんだよ、うちの雑誌は」
私は言った。

「それに、やはり時代ってものもあるしな」

「ああ」

私と久留島とは、東京の大学時代の友人だった。学校も、専攻もちがったが、私鉄沿線の同じアパートの住人として妙に気のあうところがあったのだ。私たちはいっしょにアルバイトをしたり、新宿のジャズの店に入りびたり、ときどき米軍基地反対のデモの列に加わって行進したりした仲間である。

ちやうど東京でオリンピックが開催される前後の時期に、私たちは東京での学生生活をすごした。もう二十年以上も昔のことだ。

卒業後、私はしばらく東京のテレビ局に勤めた。しかし、金沢の古い料理屋の三男坊である私には、生き馬の目を抜くような放送界の空気がどうしてもなじめなかった。結局、二十代のおわりに局を退社して、金沢へ帰った。そして二年ほどぶらぶらして過ごしたあと、長兄の援助で創刊したのが今の〈海市〉という小雑誌である。

当時、全国の地方都市のあちこちに「ヘタウン誌」とよばれる刊行物が、つぎつぎと創刊されて話題になっていた。

「ヘタウン誌」というのは、文字通り、街の雑誌である。アメリカには「ヘシティ・マガジン」という雑誌の世界があつて、全国の都市を基盤にして何千ともしれない草の根のジャーナリズムを形づくっているらしい。「アメリカのタウン誌」田村紀雄著・河出書房新社刊によれば、その起源は十九世紀末のニューヨークで発刊した「ヘタウン・トピックス」にはじまるという。

あの有名な「ヘニューヨーク」も、「アンダーグラウンド風の「ヘヴィレージ・ボイス」も、ともにその一種であるとする見方もある。そこまで範囲をひろげると、アメリカのジャーナリズムそのものが、各都市に根ざしたもので、「ヘシティ・マガジン」はむしろその本流であるとも言えるかもしれない。

わが国では、それとやや趣きを異にしたかたちで、「ヘタウン誌」が生まれた。大正時代には大阪で「大大阪」という雑誌が出たし、昭和九年に創刊された「神戸っ子」は、「神戸っ子」と名をかえて現在もリトル・マガジンの名門として全国的に有名だ。

かつて一時期、私たちを夢中にさせたのは、「新宿プレイマップ」だった。一九六〇年代の幕が降りる頃に登場したこのメディアによって、「ヘタウン誌」という言葉がひろく市民権をもつようになったとされている。

テレビ局時代に私が拾い読みした中井正一の著作から、私は「京都スタジオ通信」や、「土曜日」などという戦前のミニ・コミの存在を知った。当時、京都の喫茶店のレジなどにもおかれたそれらのパンフレットも、また一つの「ヘタウン誌」の先達だったのかもしれない。

ともあれ、失業して金沢へ帰ってきた料理屋の三男坊である私は、親戚中から白い目でみられながら、自分の「ヘタウン誌」を創刊した。それが今から十年ほど前のことだ。

雑誌の名前は「海市」とつけた。海市とは、海にあらわれる蜃気楼のことである。学生時代から愛読していた作家、故・福永武彦の長篇の題名を借りたもので、福永氏には氏が亡くなられるまでずっと雑誌をお贈りしてきた。

その頃、すでに金沢には先輩格のタウン誌が何誌もあった。地元誌としては後発でもあり、またスタッフも私と経理兼電話番号の女の子ひとりというお寒い状態だったので、おのずから個人雑誌のようなタウン誌になった。

幸運だったのは、金沢出身の作家で、芸術院会員でもあった故・高遠信彦先生が「海市」を気に入ってくださって、いろんな場所で雑誌を紹介していただけたことだった。しかも、年に何度かは短いエッセイや、青年時代の未発表の詩などをいただいて掲載することもできたのである。正直にいうと、高遠先生が気に入っておられたのは、毎月の雑誌にそえてお送りしていた、私の実家の特製の食品だったのではないかと思う。母の手づくりのカブラずしや、ゴリの佃煮、

珠ゆべし、禁鳥のツグミの串焼きなど、長兄が頭をひねって用意してくれる品を、先生はいつもとても喜んでくださっていた。北陸の酒造会社としては中堅の賀洋酒造がスポンサーについでくれたのも、高遠先生のお口ぞえがあったからだった。

そんなふうにして発足した月刊の「海市」は、はた目には同人誌に毛のはえたような温室育ちのタウン誌として号をかさねていった。それは若い読者向けの情報誌というより、むしろ眠ったような城下町の文化的アクセサリーのような存在だったのかもしれない。

私が考えたのは、広告よりも雑誌そのものの売上げで維持できる小雑誌、ということだった。それは現在のタウン誌の方向とは、正反対のやり方でどう見ても時代おくれとしか思えない方針だったといえる。しかし、私は金沢という古い人情の残る街の、その体質のひだに寄りそうようにして、一人、また一人と長期の定期購読者をふやしていったのだ。

各地のタウン誌の仲間たちからみると、それはまったく保守的で、老人めいた雑誌づくりに見えたかもしれない。しかし、私にも私なりの口には出さない考えが、ないわけではなかった。「新宿プレイマップ」も、「土曜日」も、街を形づくる一人、一人の生活者を組織することによって成り立ったメディアだったのではないかと私は思っていた。

一見、過激なアジェンダをちりばめたり、風俗の先端を敏感に誌面に反映させたりしている評判のタウン誌が、結局は広告という不特定多数の掌の上ではしゃいでいるに過ぎないの

を、私はテレビ局につとめていた経験から肌で感じていたのだ。

だから唯一の大きな財源であった酒造会社からの広告費も、経営がなんとか軌道にのった五年目からは、辞退することにした。どうせ拘束されるのなら、特定の読者に拘束されるほうを選びたいという、どう見ても傲慢な自分の考えを相手に説明しながら、私は内心ひどく怯えていたと思う。そんな青くさい考えで世間が渡っていけようとは、とうてい考えられなかったからだ。

しかし、私自身に運がついていたのか、時代のせいだったのか、〈海市〉はなんとなく続き、次第に体裁もとのい、ページの数もふくらんでいった。

最初は私が撮っていた写真も、地元のカメラマンが引受けてくれ、編集部員もあらたに一人採用することができた。

思いがけない事件がおきたのは、創刊五年目の秋だったと思う。それまではんの形だけの稿料で〈海市〉に連載をしてもらっていた郷土史家の地味なノンフィクションが、東京の大手出版社から出版されて、大きな賞の候補にあげられたのである。

それは難破して異国にながく滞在した江戸時代の北陸の漁師と、帰国後それを取調べて克明な記録を作りあげた加賀藩の奉行との、ふしぎな交流を描いた作品だった。結局、有力な賞は逸したものの、話題になった単行本は異例のベストセラーになった。年が明けると、その原作

をもとに、NHKの地方局が特別番組を制作し、海外の放送番組コンクールに出品されるとい
うおまけまでが加わった。

〈海市〉がユニークな地方誌として知られるようになったのも、その事件のせいである。定期
購読者の数もふえ、しばしば一般の新聞や雑誌に紹介される機会がかさなった。

だが、〈海市〉の本当の危機といえ、その頃すでもうきざしが見えていたのではないか
と思う。

編集費もしだいにふくらみ、関係者やマスコミ各社に無料贈呈する部数も、目立ってふえて
ゆく。地元の文化活動に引っぱりだされることも少くない。創刊して八年目、私が四十歳にな
った時期には、雑誌の経営面が急激に苦しくなりはじめる気配が感じられるようになった。

人件費や、印刷費などの上昇もひびいてはいる。しかし、なによりも大きかったのは、私自
身のことだった。

仕事で知りあった娘と三年つきあって結婚し、アパートをかりて暮すようになったのは、雑
誌が外部からは最も活気があるように見えた四年前の秋だった。やがて長女が生まれ、私は市
街地のはずれの高台に一軒家をかまえた。

その頃の私は、本当は雑誌に飽きていたのではなからうか。創刊当時の情熱もすでに失せ、
なにか新しい冒険を企てる勇氣もなくなっていた。軌道にのった〈海市〉を波風たてずに維持